

横浜ユーラシア文化館開館 20 周年記念シンポジウム 「東アジアの帯金具と古代の日本」

討議 岡田有矢、小嶋芳孝、浜田久美子、澤本光弘
司会 柳沼千枝*

司会 本日のシンポジウムは、鈴木靖民先生**のご発案により横浜ユーラシア文化館が企画し、準備を進めてきたものです。穴太遺跡出土の帯金具をめぐる、4人の専門家の先生方にご講演をいただきました。これから討議に入りますが、充実した内容をご準備いただきながら時間が短かったため、もし論じ残したことがおありでしたらその補足からお願いいたします。

小嶋 金沢市の海岸部、犀川の河口周辺に古代の港があって、ここに渤海船が来航していたと考えています。金沢市の海岸部にいくつか港に関係する遺跡があり、その一つが畝田ナベタ遺跡で、9世紀には渡来した渤海人を滞在させる便処（べんしょ）に関係した遺跡だと思っています。ここから渤海人は都に向かって行きますが、この時船で行くのか陸路で歩いて行くのかが問題です。『三代実録』の元慶7年（883）正月に、加賀に来航した渤海使節のために、加賀から都へ行く間の道路をきれいにしなさい、道端に死体が転がっていたらきれいに掃除しなさいとか、宿舎をきれいにしなさいとかいう命令を朝廷が出したと記されています。渤海使節は、加賀から都へ北陸道を歩いて向かっていたことがわかります。北陸道の沿道に穴太遺跡があります。渤海使節が都に入る前に穴太で祭祀をおこない、その祭具に帯金具が使われたということだと思っています。このことが先ほどの報告で抜けていたのでお話ししました。

司会 穴太遺跡の帯金具の位置づけにもかかわることで、もう一度ゆっくりとお話を補足していただきました。それから浜田先生、お願いいたします。

浜田 最後に【史料10】の570年に、初めて来た高句麗使が山背の相楽館に安置されたという話をしました。その相楽館のあった相楽郡（そうらくぐん）に高麗寺跡がありますが、この辺りは高句麗滅亡に伴い日本にやって来た高句麗人なども含めて、高句麗人の拠点であったと考えられています。この高麗寺にも、高句麗人が琵琶湖から逢坂山を越えて南下してきた可能性があるのも、穴太遺跡というのは、8、9世紀北陸に来朝するようになった渤海使だけではなく、もっと前の高句麗の時代から、境界になるような場所だったと考えてもいいと思います。渤海使が来た時には、高句麗文化の基盤があったことをふまえて、穴太遺跡を考えるべきだと思ったので、そこを補足させていただきます。

東山道の話もしましたので、そのことも少し補足します。霊亀2年（716）、これはまだ第1回の渤海使が来る前ですけれども、武蔵国に周辺の国に住む高句麗系の人たちを集めて高麗郡が建郡されます。武蔵国は当時東山道に属していたわけですが、高句麗系の文化が東山道を通じて穴太遺跡のある近江国にもつながっていたとみることもできます。また、武蔵国は宝亀2年（771）に東海道に付け替えになり

*YAGINUMA Chie 横浜ユーラシア文化館主任学芸員
**SUZUKI Yasutami 元横浜市歴史博物館館長 / 國學院大學名誉教授

ますが、そうすると今度は、高句麗文化が、東海道を通じて広域に広がっていく。ですから、渤海使が来たときには、高句麗の時代からの交流圏がすでに存在していたのではないかというようなことを考えました。

司会 今のお話は穴太遺跡の性格との関わりで非常に興味のあるところですが、今の浜田先生のお話を、岡田先生はどのように受け止められますでしょうか？

岡田 穴太に限らず、大津市の中でも今日最初の話の中でも紹介させていただきました湖西といわれる地域の中で、かなり渡来系の遺構、特に古墳とか大壁造りの建物といったものが多く見つかります。湖西の地域の中でも大津市役所のある錦織（にしこおり）と呼ばれる地域から、比叡山延暦寺とか日吉大社のある坂本の地域までの一帯は、渡来系の人たちがいっぱいいた地域だと言われています。その理由が、渡来系の人たちが作ったのではないと言われる、形がドーム状になっている石室ですね。普通畿内型の古墳の石室といいますと、縦に積み上げて造るものなんですけれども、穴太も含めて錦織から坂本までの地域に出てくる古墳群というのは、少しドーム状に石室が造られます。また大壁造り建物と言いまして、その当時、日本の多くはいわゆる竪穴式住居というような、地面を掘って、その上の床で生活しているという住居が大半だったかと思うんですけれども、穴太の地域には、周辺の溝だけを掘ってその溝の中にいっぱい柱を埋め込んで、それを土で覆い隠すような建物というのが見つかりません。それらの起源については諸説いろいろありますが、百済とか朝鮮半島系に求められています。このように、いわゆる渡来系の氏族とか遺構が昔から語られるような地域で、6世紀後半、渤海が入ってくるもっとも前の時期から穴太にはそういった外来のものが入ってきているのは間違いありません。

大津には667年から5年間だけ都が造られた時期があって、天智天皇がそこで即位をするんですけども、天智天皇の即位というのも、そういった渡来系の氏族のバックがあつたことというように、一般的には考えられています。

司会 浜田先生から渤海の前、高句麗の段階からの広範な交流圏があつたということも、穴太遺跡の性格として考えた方がよいのではないかというお話がありまして、岡田先生からも、渡来系の遺構・遺物について今お話があつたところですが、穴太遺跡につきましては今も調査が進んでいるところでして、これからまたどんな遺構・遺物が出てくるかわかりません。渡来系の性格を色濃くもつものもかなり出てきているということと、先ほど控室の方で、錦織など渡来系の地名が残っているということも一つの痕跡になるのではないかというお話をしていましたので、まだまだ可能性を秘めている遺跡だといえます。それでは、そこから出た帯金具というのはいったいどういう位置づけができるのかということに話を進めて行きたいと思います。

その帯金具ですが、岡田先生のご講演の中で、帯金具の出た龍潭洞遺跡は航海にまつわる祭祀遺跡ではないかというお話がありました。また穴太遺跡の帯金具も流路から出てきているということで、祭祀的な遺物ではないかということの可能性として言われているわけですが、龍潭洞と穴太遺跡では、航海にまつわる祭祀と境界祭祀ということで若干性格が異なるのかもしれない。そのあたりについて小嶋先生にお伺いしたいと思います。

小嶋 龍潭洞遺跡は今年の9月に岡田さんと日大の山本孝文先生と、それから青森県教育委員会の中澤寛将さんと4人で資料を見に行つて、龍潭洞遺跡も見学させていただきました。先ほどの岡田さんの話にもあつたように、龍潭洞遺跡というのは済州島の北側の海岸にあつて、済州市の西側にあります。空港

と済州市内とのちょうど中間地域で、遺跡の両側に川が流れていまして、川に挟まれた微高地の上にこの遺跡が立地しているような感じでした。発掘調査は 20 年近く前に青少年センターを作るための緊急調査でおやりになっているんですが、報告書を見ると遺構というか穴みたいなのはほとんど無くて、土器が大量に出土したことが書いてありました。その大量に出ている土器に混じって、帯金具とかガラス玉や勾玉が出土したようです。日本でこのような遺物の出土状態が発掘された場合は、神まつりの場所にすることが多いので、日本の考古学の考え方からすると、龍潭洞遺跡は祭祀遺跡の可能性が高いということになるかと思えます。ただ、じゃあ何のために誰が祭祀をおこなったのかということになるんですが、これはなかなかの難問です。実は済州島で博物館の人たちにお話を伺ったんですが、済州島でわかっている考古学的な遺跡は、高麗から後は結構いろいろ遺跡があるんです。特に高麗末期に元から攻撃を受けますので、済州島に高麗人が立てこもった、三別抄たちが立てこもった城跡がきれいに残っています。これが韓国の人たちにとっての誇りだと思うんですが、かなりしっかりした形で今整備されています。ところが高麗以前ですね、新羅とか昔耽羅と呼んでいたその時代の遺跡というのはほとんどわからないようです。『延喜式』とか日本の史料には耽羅が出てくるわけですね。耽羅からアワビを持ってきたとかありますが、そういう時期の遺跡がたくさんあるのかと思ったらほとんど無い。龍潭洞遺跡の年代も、新羅の末から高麗の初めぐらいだということに土器から見るとということなので、10 世紀初頭前後ぐらいかと思うんですが、それと並行するような遺跡もあまりよくわからないということで、ちょっと意外でした。単にわかっていないだけでこれから調査していけば出てくるのかもしれないんですが、今のところ済州島の考古学の状況から言うと、誰が何のために祭祀をしたのかというのは、なかなか決め手がない。渤海が唐の南部、江南の方

に交易船なり遣唐使船を出した時に、済州島で航海の安全の祭祀をしたのかなとも思うんですが、そうした場合、渤海人がそこでおまつりをしたのか、済州島にいた人たちがおまつりをしたのかが問題です。簡単には結論を出せないのですが、出土した土器は済州島の土器が使われているので、私は済州島の人々が主体となって祭祀が行われていたと思っています。

司会 簡単に結論が出ないというのが研究の最前線たるところだと思います。この帯金具が出土した穴太遺跡の場所ですけれども、北陸道から入京するルートに近接しているということで、境界祭祀というお話は浜田先生が具体的に文献史料をあげてお話をなさっていました。それについては諸先生方で特に異論はないということでもよろしいでしょうか？異論があるという方がもしいらっしゃれば、おっしゃっていただければと思います。

小嶋 新聞記者からコメントを求められた時に「境界のおまつり」と言ったのは私なので、ちょっと責任上話をさせてください。『三代実録』貞観 14 年(872) 条には、加賀に来航した渤海使節が都に入った時の様子が詳細に記されています。3 月に、平安京に渤海使節が入る前年に、陰陽師が外国から人が来たら悪いことが起きると占っていた。実際、渤海人が都に入ってきたら、咳の病がはやってたくさんの方が亡くなった。おそらく、コロナかインフルエンザのような感染症が流行ったのかとおもいます。そういうことがあって、宮殿に入る正門、建礼門の前で大祓の祭りをして厄除けをしたり、石清水八幡宮など色々な神社に使いを送って、祟り神が来ないことを祈っています。また、天皇は普段だったら渤海使節に謁見するんですが、この時は渤海使節に会っていません。渤海使節が都に入ったときの大騒ぎの様子を、知ることが出来ます。おそらく 9 世紀代に穴太遺跡を通過した渤海使節は、都に災いを

持って来ないように、ちょうど私達もコロナが流行った時に外国から人が来るとコロナが日本に流行するという一種の恐怖心みたいなものがありました。今だと科学が発達しているのでそんな恐怖心はすぐ消えましたが、古代だと原因がわからないので恐怖心がかなり強くあって、祟り神が渤海人と共に都に入り災いが広がってたくさんの人が死んでゆくということを恐れて、各所で祟り神を払う祭祀をやったのだと思っています。穴太遺跡でも、駅家があってそこに渤海使が滞在したとすれば、これから都に入る前に祓えをして、祟り神を払い落としていたと思われる。それから山科でもおそらく祭祀をやっていると。そうして十分に祟り神を払ってきれいになった上で、都に入るということがあったと考えています。

司会 報道コメントではそういった趣旨でおっしゃっていたということが大変よくわかりました。

一つ岡田先生に確認をさせていただきたいのですが、流路が870年代から900年代頃までか、というようにおっしゃっていましたが、その900年頃というのは、広く10世紀前半まで含めてお考えということでしょうか？

岡田 おそらく今言われたのが流路の、左側の薄い網掛けの入っている方の話かと思いますが（岡田講演図3）、基本的には870年くらいから埋まり始めています。調査の段階できれいに、薄い色をしている古い方と濃い色をしている新しい方とははっきり掘り分けが完璧にできたわけではないので、具体的に遺物を全部見てみて、ここから完全に、古い溝が一度埋まった後に掘り返した時期だと言えるわけではありません。ただ右の濃い方の流路っていうのが、そんなに幅も広くなくて、石積みも東側にはあって、西側にも石がちょこちょこあったりするので、石積みがあった痕跡だろうと。これだけ細い部分で、石積みも崩れてしまって埋まってしまったと考える

と、そんな長時間流路として機能していたとは正直考えにくいとすれば、帯金具が出た古い方は、9世紀の後半から、ほぼ第4四半期から埋まり始めて、10世紀いっぱいぐらいで完全に埋まったと考えるのが自然かなと思います。

司会 それから考えますと、帯金具をもたらした可能性がある渤海使としましては、貞観13年（872）・元慶6年（882）・延喜19年（919）の3回のうちのどれかである可能性が考えられるということでしょうか？〈岡田氏同意〉はい。ありがとうございました。

それでは渤海使がもたらした帯金具についてですが、小嶋先生のご講演の中では、花文様がどういう系譜を引いてどこで作られたものなのかということをご説明くださいました。澤本先生が契丹の可能性は低いとおっしゃっていましたが、小嶋先生の結論としましては、契丹の影響を受けつつ渤海で製作されたものというお考えでよろしいでしょうか？そのあたりのお話を伺えればと思います。

小嶋 内蒙古の敖漢旗・李家營子というお墓から出た帯金具の資料があります（小嶋講演図7）。これは8世紀の前半代まで上がる可能性がある資料でして、澤本さんもおっしゃっていましたが、ソグドの影響もあるし、契丹の領域なので契丹なのかな、それとももう少し西に突厥がまだこの頃いますので、突厥の影響を受けているかもしれないです。いずれにしてもここで8世紀の前半に、畝田ナベタ遺跡や群馬の鳥羽遺跡で出たのと同じような、両サイドに唐草文が置いてある、花を横から見たデザインの帯金具がすでに使用されていたわけです。

一方の唐では、こういう花柄のデザインの帯金具というのはほとんどわからない。実は先週京都で国際シンポジウムがありまして、西安から先生が3人来られました。唐の帯金具でこういう花の文様のあるのがあるかと聞いたら、あまり見たことなくて、

唐の場合はあったとしても獣文のものはあるけど、こういう花のものは普通の銅製の帯金具には無い。ただし玉で作ったものとか金製の帯金具では、花をデザインしたものがあるというお話でした。

唐では、こういう花のデザインがかなり早い段階からあるというのは、斎東方先生の資料でもわかります（小嶋講演図 4）。こういうデザインが唐から契丹ないし突厥の方に伝わって、それが渤海へ伝わったか。逆かもしれないですけどね、突厥から唐にきた可能性もあるのでなんとも言えないんですが、そういう花柄のデザインを帯金具に使いだしたのが突厥か契丹。渤海も最初の頃は普通の、唐と同じような帯金具なんですけど、9 世紀末から 10 世紀の初めぐらい、唐が弱体化して滅亡に向かうような頃に、唐の規制が緩くなって、自分たちのデザインの帯金具を作れるようになると、その時に契丹の影響を受けて、こういう花柄のデザインの帯金具を使うようになったのかなと思っています。

ただ問題なのは、畝田ナベタ遺跡と鳥羽遺跡にある帯金具とまったく同じものが渤海にあるかと言われると、実はまだ見つけることができていません。しかも畝田ナベタ遺跡では花柄の模様の下のへこんでいる所に黒漆を塗っているんですね（小嶋講演図 6 上）。これはぱっと見た時に黒地の上に金色で花の模様が浮かび上がるような、非常にきれいなデザインなんですけど、同じような帯金具は渤海でまだ確認できていません。ですからこういう漆を置くような作業を渤海人がやったのか、日本にこの帯金具が来て日本人がやったのか、その問題はまだ解決が来ていないんです。ただ、先ほどちょっとご紹介したように、渤海にも漆器の椀が出ていますし、それから実は、クラスキノ城跡から漆をといたお皿が出ています。これは奈良文化財研究所に資料を持って行って分析してもらったら、漆だということがわかりました。その成果を報告するため、再度その土器を実測しようと思ってウラジオストクの研究所に行ったら、もうそれは倉庫に片付けてしまって簡単

には出せないということで、報告ができないままになってしまっています。こういう資料があるので、私の頭の中では渤海人は漆を加工するようなことはやっていたと思っています。ですから、まだ見つかってないだけで、帯金具のこの花文のくぼみに漆を置いているのは渤海の可能性もあると思っています。もう一つ、渤海の遺跡で出る、唐と同じような普通の帯金具にも漆の膜面が残っている資料が多くあります。日本の帯金具の表面にも漆が残っていることが多いのですが、同じようなことが渤海でもあるので、渤海人が漆を帯金具に塗るということは元々あったんだろうと思っています。

おそらく 9 世紀の後半ぐらいから、先ほどラクダのペンダントをご紹介しましたが、渤海は経済的には契丹との関わりが深くなってきますので、そういう中でこういう花柄の模様を、渤海人も使うようになったのだと考えています。

司会 今のお話は澤本先生のご結論とは齟齬はしないということですのでよろしいですね。（澤本氏同意）

今、渤海には畝田ナベタ遺跡や鳥羽遺跡と同じ帯金具はないけれども、まだ見つかっていないだけではないかというお話を伺いました。今回の穴太遺跡の帯金具も、渤海製の可能性をもつものとしてはまだ国内 3 例目であるわけです。現在見つかっている貴重な 3 例から言える限りのことを今、最新の知見として先生方にはご発表をいただいております。

浜田先生のお話や小嶋先生のお話の中でも鳥羽遺跡のことが出てきましたが、田中広明先生、なにかコメントがあればお願いしたいと思います。

田中広明*** 僕はたまたま出身が前橋市で、この鳥羽遺跡の帯金具は今から 40 年ぐらい前に出土したんですけども、なかなか注目されなくて、群馬県の展示施設に置いてありました。小嶋さんからいろいろ畝田ナベタ遺跡のことを聞いていて、あ、そういえばと考えたものがこの資料です（小嶋講演図

***TANAKA Hiroaki 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

6)。注目していただきたいのは、中の文様とかそういうことはちょっと横において、垂孔っていう透かし孔が中の方についているんですけれども、この右と左のバランスを見てもらうと、2つともよく似てますよね。左の方の幅が広いんですね。同じ型で作らなければこういうようなことは起こらない筈なので、おそらく同じ型で作ったものなのかなあと考えたところです。

それと、今日見せていただいた穴太遺跡の資料は魚々子打ちが非常に細かくて、畝田ナベタや鳥羽の資料とは全く技術的に違うものだなあとということがよくわかりました。とてもよく残っていて、流路から出たから非常に保存状態がいいのだと思います。

鳥羽遺跡のことですけれども、御長真人広岳（みなながのまひとひろおか）という、渤海使を故国に送り届ける人物がおります。上野国の介を担っていたものですから、上野と渤海と鳥羽遺跡と結びつけて考えたことがあります⁽¹⁾。僕はそういう意見を持っていました。以上です。

司会 田中先生、そうしますと、先ほど浜田先生の方から、東山道を介した高句麗系の交流拠点というお話がありましたが、それについては何かコメントおありでしょうか？

田中広明 こういったたぐいのものを貰うとか、あげるとかというようなことは、道長が馬とか帯を自分の関わる国司たちにあげたとか、そういう個人的なつながりが非常に大きいので、大きな文化の流れの中でパッケージで考えるよりも、もっと個人的なつながりの中の話に凝縮したほうが、僕はいいのかなと思っています。あまり大きく高句麗や渤海の人々のパッケージの中で考えるよりも、人と人とのつながりの中で物が動いていく、とおさえたいほうがいいと思います。だからこそ穴太に出て、だからこそ畝田ナベタが出て、ということだと思います。

司会 それぞれ専門家の方々の見解が異なるというのは当然のことで、それについて今ここで議論を戦わせていただくということはしませんが、それぞれの先生方のご研究の進展の中で、見えてくる結論があるかなと思います。

澤本先生の方から、裴瑒に関わらせて当時の情勢のお話をいただきました。日本国は東丹国の使者として裴瑒を迎えて、渤海の滅亡のことを聞いたということでした。先生のお話の中には登場しませんが、のちの日本の『将門記』などの中にも、かなり渤海の滅亡の話は正確に語られているところですが、『遼史』には日本が使いを遣わしたというような記事もあります。当時の日本と契丹との関係というのはあまり想定すべきではないのかどうか、お考えをお聞かせいただければと思います。

澤本 実は今日お示した地図の中にも、小さくは「日本の使者が来た」という『遼史』の記事は載せていて、聞かれたら答えようと思っていただけなんですけれども、日本側の史料として裏付けはとれないっていうのは現時点では間違いはない。ただ、もう少し後の時代になりますと、日本の僧が契丹、その当時は遼ですけれども、に来たという記述はあって、そちらの方はそれなりにその通りだったであろうということは窺えます。だから、あまりはっきりしたことは言えないですけども、何らかの形で商人なり僧なりがやって来て、別に国の使節として来たわけではないけれども、日本の人が来たということで書かれたということは想定してもいいのかなとは思っております。

司会 東丹国の使者としてやって来た裴瑒を追い返したのは、日本が国際情勢に関わりたくなかったからだ、みたいなことをおっしゃる専門家もいらっしゃいますので、当時の日本の外交姿勢というのはどうだったのだろうかと思ってお尋ねをしたのですが、今のお話では、国家的な使者という形ではない

(1) 田中広明「渤海からの帯金具」『日本古代考古学論集』同成社、2006年

にしても、交易などを通じて商人や僧の往来はあったのではないかとということですね。

小嶋 考古学の立場から言いますと、実は本州ではなかなか認識できないんですが、北海道・サハリンですね、ここでは実は契丹との関係がだんだん見えていまして、特にサハリンの一番南端の西海岸ですね、そこに白土（シラヌシ）という所があって、白土土城という小さな平地城があります。ここを 20 年以上前に、中央大学にいらっしゃった前川要先生が調査されまして、城壁の調査で土器の破片が何点か出土しました。それを前川さんは東北系の須恵器だ、日本の土器だというふうにご発表なさったんですが⁽²⁾、どうもそれは間違いで、現物を私も見たんですが、隅っこに小さいスタンプ文があるんです。スタンプ文を伴った土器は沿海州で多く出土していきまして、沿海州のスタンプ文土器のルーツを探っていくと、契丹に行くんです。

渤海の滅亡前後から契丹系の遺物が、先ほどのクラスキノにもありましたけれども、沿海地方で出土しています。特に渤海が滅亡してから後、10 世紀の後半から 11 世紀ぐらいに、契丹土器や契丹系の遺物が沿海州の各地で出土しています。この頃は、大きな平地城とか山城とかもできるんですね。文献には全然残っていないんですが、水系単位にかなり大きい地域集団ができていたと推定しています。沿海地方で契丹とつながる一種の経済圏ができあがって、その経済圏の端っこがサハリンの南部とか、実は北海道の北部にも契丹系の遺物が入っています。有名な網走のモヨロ貝塚からも遼の土器が出土したと報告が出ています。オホーツク文化の最後の段階に、契丹系の遺物が入っていたようです。本州では考古学的に契丹との関係を考えることが出来る資料はないんですけれども、北海道では、10 世紀頃の東北アジアの人やモノの動きが見えつつあるという状況です。

司会 渤海は日本史の教科書に出てきますが、契丹というと世界史の教科書に出てくるので、日本古代史に興味のある方にとっては、なかなか遠い世界のことみたいなイメージをお持ちになるかもしれません。ですが今お話を伺いましたように、契丹と日本列島とのつながりがだんだん見えてきたということで、これからもますますそういった、今まで見えなかった関係が見えてくるのかなという気がいたします。

渤海、契丹、それから古代日本をめぐる関係につきまして、お話を会場の専門家の方に伺えればと思います。田中史生先生、いかがでしょうか？

田中史生**** 私がお聞きしていて気になったことは、帯金具（巡方）が一つ単体で出てくるということでありまして、これは穴太遺跡だけじゃなくて、だいたいそういう出方が多いと思うんですけども、つまり使い方とか使われ方の問題です。もし祭祀で使ったとしても、誰が主体となってこれを使ったのかということですね。先ほどの濟州島の問題をふまえますと、穴太遺跡のものも日本人が使ったのではない可能性が高いと思いますけれども、このように、単体で使われることをどう考えるかということです。帯そのものが全部セットで出てくるわけじゃないですから、帯をもらっているというよりは金具としてもらっているのだと思うんですけども、その辺がちょっと気になっています。北方などで、金具などを使う祭祀、あるいはプレゼントで使うということがあるんだろうかということが、一つは気になったことです。

あと、帯金具そのものと直接かかわるかどうかはわかりませんが、日本史の中で言うと、交流とか、あるいは文化的な流れというのは、どちらかというと西日本から、九州から東へというイメージが非常に強いかと思います。けれども、今回もそうですし、先ほど小嶋先生も言われましたが、私などが興味があるのは、たとえば九州でも、中国の大鏡

(2) 前川要「白土土城の発掘調査」『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房、2007 年

****TANAKA Fumio 早稲田大学文学学術院教授

に穴を開けたもの、通常は北方で使われるようなものが、ぽんっと九州で11世紀のもので出てきたりもしています。それはどこがつなぐのかわかりませんが、おそらく日本海側あたりに宋商人あたりが来ていて、でもその人たちは北の方との交流を狙っている可能性はありうると思うんですね。つまり北と日本海側の若狭湾前後ぐらい、それから九州がどうなっているのか、これは文献ではそんなにわからないんですけれども、若干モノでわかるようになってきている側面があります。今回の帯金具について言えばその時期までは下らないかもしれませんが、今回のようなモノが出てくることによって、日本列島が北と南に長いというか、広いというところで考える材料というのが出てきたというので、非常に貴重な発見、シンポジウムだったと思います。

司会 ありがとうございます。

では、金沢からお越しになった古畑先生、お願いいたします。

古畑徹***** 古畑でございます。2点だけ。

一つは先ほど畝田ナベタや鳥羽の帯金具に漆をおいたということから、渤海の漆工芸の話が出てきましたけれども、浜田先生が触れられたように、漆は渤海使への回賜品として日本から渤海に贈られています⁽³⁾。漆の分布がどこまでの範囲であるかということを一回確認しなきゃいけないんですが、もし渤海で大量に取れないとすると、渤海の漆工芸で使われた漆は日本からの輸入品という問題として考える必要性もあるということ。これが一つです。

もう一つは澤本さんの最後の話。私は自分の本の中で一応、滅亡前の渤海はある程度乱れていたという書き方をしていますが⁽⁴⁾、実はすごく疑っていたんです。ただ、三上次男先生⁽⁵⁾に反旗を翻すだけの度胸がなかったというのが正直なところです。私も実は疑ってしまっていて、今のところ史料を読んで

いくと乱れているというのは違うんじゃないかなあというふうに思っているんですが、まだ確証をもっていません。ただ「彼の離心」は、契丹の事例を入れなくてもそのまま読めば普通に「彼」が指しているのは渤海ですから、その解釈で間違いありません。問題はその後「釁(すき)」の字の所で、あれはもう一回用例を調べてみたらいいと思います。用例から見て、普通に隙間の意味で使っているのか、それとも相手側に何か問題が起こっている時に使っているのかによって考え方を変えなきゃいけないところで、そこさえ詰めればいけるんじゃないかと思っています。ということで、私としてはこれを、ぜひしっかりやっていただけたら面白いことになるなと思っています次第です。

金子修一***** ちょうど隣の古畑氏にマイクが来たものですから、一つだけ言っておきます。先ほど『遼史』の日本の使節のことがありましたが、『遼史』を見ていると、本紀はおそらく半分以上外交関係の記事だけです。だからそういうことで、数を増やすために、たまたま一つぐらい日本の商人か僧侶の例があったのを、外交使節みたいな取り上げ方をしたということは充分考えられると思います。

古畑 商人と僧侶はあの頃、宋や遼でいっぱい使節扱いされています。

司会 最後に、このシンポジウムの発案者であります鈴木靖民先生に、コメントをいただければと思います。

鈴木靖民 大津市の穴太遺跡で帯金具が見つかったというのを、新聞かあるいはインターネットで見つけて、それで岡田さんにご連絡差し上げて、というのが始めだったと記憶します。そのあとユーラシア文化館で何かできないものかなと思いついて、柳沼さんにお話したことがきっかけで、前においで

(3) 『続日本紀』宝亀八年五月癸酉条

(4) 古畑 徹『渤海国とは何か』吉川弘文館、2018年

(5) 三上次男「渤海国の滅亡事情に関する一考察」『高句麗と渤海』吉川弘文館、1990年

*****FURUHATA Toru 金沢大学人間社会研究域 国際学系教授

*****KANEKO Shuichi 國學院大學名誉教授・山梨大学名誉教授

人の専門家の方々に、大変有意義な、それぞれ個性あふれるお話をいただきました。全体のこの遺物というか資料の性格付けとか、それからその背後にある、渤海のものという意見が強かったと思います。そうだとすると、どうしてこれが穴太から見つかったのかということが問題です。先ほど田中史生さんがお話になったことと重なると思いますけれども、その歴史的な考察といえましょうか、考えですね、これはまだまだ今日は結論を持ち越すことになったなと思いました。なので、これを今日お越しの皆さまも含めて、一番いいのは本にすることですが、本に

することは大変ですので、その前に地元のテレビ神奈川ですとか、そういう機会の報道も結構だと思います。今日は出版社の方も来ておられますので、お考えいただければ大変意味のあるものになると思います。

司会 それではこれにて討論を終了させていただきたいと思います。拙い司会で専門家の先生のお考えを十分に汲み出せなかったと思いますが、申し訳ございませんでした。

横浜ユーラシア文化館紀要 第12号

Bulletin of the Yokohama Museum of EurAsian Cultures No. 12

2024年3月31日発行

編集 横浜ユーラシア文化館
〒231-0021 横浜市中区日本大通12
Tel.045-663-2424 Fax.045-663-2453
www.eurasia.city.yokohama.jp/
発行 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団
印刷制作 TAKT-JAPAN株式会社

Edited by the Yokohama Museum of EurAsian Cultures
12 Nihon-odori, Naka-ku, Yokohama, Japan
Published by the Yokohama Historical Foundation
Printed in Japan by TAKT-JAPAN, CO., LTD

ISSN 2758-6332